

風景歩きワークショップによる地域らしい風景の認識変化に関する研究

国土交通省松山河川国道事務所
愛媛大学
愛媛大学大学院
㈱オリエンタルコンサルタンツ

特別会員 ○川本浩紀
学生会員 上田真弓
フェロー 柏谷増男
正会員 中埜智親

1. はじめに

近年、松山都市圏では、特に南部郊外地域の発展を受けて、中心部と郊外部を結ぶ幹線道路の渋滞が問題となっている。この渋滞を緩和するために、現在、松山都市圏南部地域では、新たに松山外環状道路の整備が進められている。

一方、2004年の景観法の制定を受け、都市施設の整備においては、単に経済的利便性を追求するだけでなく、地域風景・風土との調和が求められている。特に道路整備においては、地域住民にとっては日常生活に密接に関係することから、地域に即した沿道景観の創出やその過程における合意形成が強く望まれている。加えて、情報化とモータリゼーションが一層進む現代社会においては、将来を担う若者が地域社会と触れ合う機会が徐々に減少しており、地域固有の風景・風土に対する認識が薄れ、長期的にはそれが損なわれる危険性も指摘できよう。

以上のような問題意識のもと、本研究では、松山外環状道路周辺の中学校4校（図1）を対象に風景ワークショップ（以下、WSと略記）を実施し、WSが中学生の生活景（日常生活圏の風景）に対する認識に及ぼす影響を明らかにする。そして、この結果を踏まえて、地域固有の風景・風土を継承する手段として、学校教育の中に風景教育を導入することの有効性を検討する。

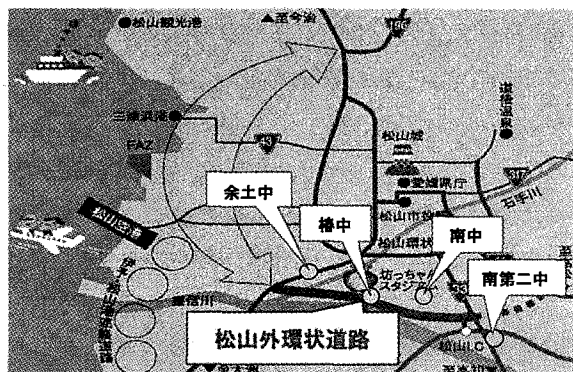


図1 松山外環状道路と周辺の中学校4校の位置

2. 中学生 WS の概要

実施した4校でのWSのうち、南第二中学校におけるWSのフローを図2に示す。WSでは「風景歩き」と「クラス討議」を実施した。風景歩きとは、ただ町を歩くだけでなく、地域の魅力や問題点を発見し、参加者が互いに風景について語り合いながら歩くことである。風景歩きでは、中学生全員にカメラ機能付きGPS携帯を配布し、それを用いて印象に残る風景の撮影を依頼した。風景歩き後にはクラス討議を実施し、撮影した風景写真の中で、好きな風景と嫌な風景について話し合い、最終的に大切にしたい風景について皆で考える場を設けた。

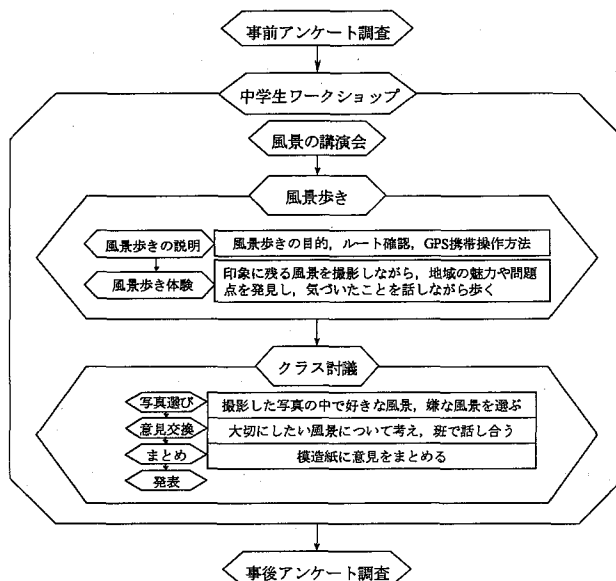


図2 南第二中学校 WS フロー図

3. 研究方法

中学生の生活景関心空間（どの場所でどんな風景に関心があるか）を明らかにするために、風景歩きで撮影した写真とGPSにより取得した位置データを用いてクラスター分析を行い、そこで描かれるオブジェクト空間を考察する。また、アンケート結果をもとにWS前後の意識変化を明らかにする。これらを踏まえて、風景歩きの効果を明らかにする。

4. 分析結果

(1) クラスタ分析

クラスタ分析とは、データ間の距離に応じてデータをグループ化し分類する方法である。本研究では、それぞれの写真について、撮影された場所（緯度・経度）、撮影者の性別、撮影対象の3つの属性を用いてクラスタ分析を行った。

松山外環状沿道で風景歩きを行った南第二中データの分析結果を図3に示す。このデンドログラムをケース5で切断すると9個のクラスターに分類された。次に、分類した各クラスターの特徴を把握するために、クラスターごとに属性の平均値を算出し、図4のように地図上にプロットした。男女共通して関心を示している風景は、田畑・川・花草木・道である。一方、ゴミは男子だけが、人は女子だけが関心を示しており、男女で風景の関心空間が異なるといえる。従って、沿道景観づくりにおいては、そのような価値観の相違を明確に意識し、それをいかに調整するかが重要であると言えよう。

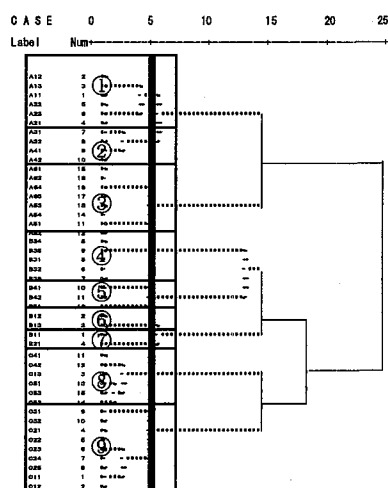


図3 デンドログラム（南第二中データより）

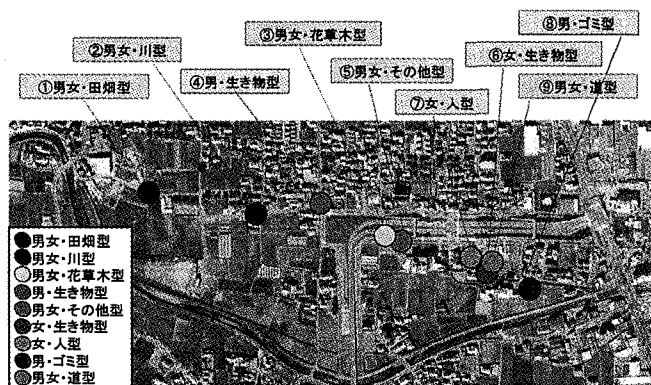


図4 生活景関心空間(各クラスターの分布と特徴)

(2) アンケートデータによるWS 前後の意識変化

WS 前後に実施したアンケート調査データを用いて、WS による中学生の意識変化を分析した。

図5より、WS 後では「どちらかという満足している」が34%に増加し、風景歩きによって地域の魅力を発見したことで、満足度が高くなったものと考えられる。また、「わからない」と答えた人はWS 後では5%に減少し、若干ではあるが満足度が低下したケースも見受けられる。WS 前で「わからない」と答えた人の中で「あまり意識して風景を見たことがないから」という意見があったことから、WS 前では風景の基礎知識が不足していたものの、風景歩きを通じて風景やまちに対する理解度が向上したものと考えられる。以上より、WS の実施は、風景やまちに関する問題点の発見や態度形成において非常に有効な手段であると考えられる。

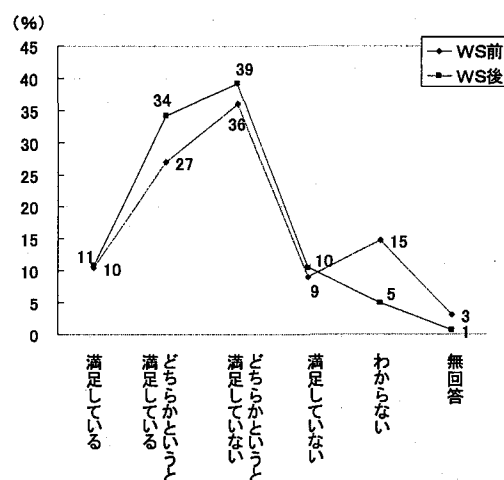


図5 住んでいるまちの満足度（中学校4校）

5. まとめ

本研究では、クラスタ分析によって、中学生の生活景関心空間を明らかにし、沿道景観に必要な風景や関心空間の差を明らかにした。また、アンケート結果から、WS 前後で風景やまちに対する認識変化が生ずると共に、それらに対する問題意識や好き嫌いの態度が形成されることが判明した。従って、WS は風景づくりの初期の段階において非常に有効な手段であると考えられる。なお、今回のWS は地域を知る中学生と土木工学を学ぶ大学生、土木を実務とする国土交通省が相互に作用しあうことによって実現したものであり、風景教育を導入するに当たっては、その点も非常に重要であると思われる。